

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：82610

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15H05075

研究課題名（和文）看護師の研究成果活用力向上を支援する問題克服型教育プログラム開発 - EBNの推進

研究課題名（英文）Development of Educational Program for Nurses to Improve Their Research Utilization Competency in Hospital Settings Toward Evidence Based Nursing Care

研究代表者

亀岡 智美（Kameoka, Tomomi）

国立研究開発法人国立国際医療研究センター・国立看護大学校・教授

研究者番号：50323415

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,700,000円

研究成果の概要（和文）：研究目的は、EBN推進に向け、看護師が研究成果活用力に関わる問題を自己診断し、その克服を支援する院内教育プログラムを開発、普及することである。そこで、質問紙調査を通じた看護師の研究成果活用力、それに関わる学習、教育、職場環境の解明、先行研究との成果に基づく教育プログラムの作成、教育プログラムの2病院における実施、参加した看護師からのデータ収集と分析を行った。結果は、作成した教育プログラムが看護師の研究成果活用力向上に有効であることを示した。また、このような過程を経て、看護師個々による研究成果活用力に関わる問題の自己診断とその克服を支援する4種類の研修から成る教育プログラムが完成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究の成果として産出される新たな知識や技術の看護師による活用は、エビデンスに基づく看護実践（EBN）、それを通じた看護実践の質向上の推進に不可欠である。しかし、先行研究は、看護師の多くが、看護実践への研究成果活用の重要性を理解しながらも実行できておらず、その改善を重要な課題としていることを示す。本研究は、このような状況の打開に向け、看護師個々が自己の研究成果活用力を自己診断し、必要な研修を選択受講することを通じ、その研究成果活用力向上を図ることを支援する教育プログラムを開発した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to develop an in-service education programs for hospital nurses that helps them self-diagnose problems they may have regarding research utilization and suggests ways to overcome them in order to promote EBN. The study involved the following three activities: 1) Surveys were conducted to clarify the research utilization competency, learning situation, educational situation, and related work environment of nurses; 2) An educational program consisting of four types of seminar was created based on previous research and the survey results; 3) The educational program was implemented at two hospitals, and data of participants were collected and analyzed. The results showed that the educational program was effective for improving nurses' research utilization competency.

研究分野：看護教育学

キーワード：研究成果活用 教育プログラム開発 EBN 看護師 看護継続教育 看護教育学

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

研究の成果として産出される新たな知識や技術の看護師による活用は、エビデンスに基づく看護実践 (EBN) の推進に不可欠である。しかし、看護師の多くは、看護実践への研究成果活用の重要性を理解しながらも実行できておらず、その改善を重要課題としている。この現状打開に向けては、看護師の研究成果活用力向上の効果的な支援を可能にする教育プログラムの開発が不可欠である。しかし、国内外の文献を検索しても、看護師の研究成果活用力向上を支援する教育プログラム開発をめざした研究は見つけれない (亀岡他, 2010, 2011)。

そこで、研究代表者らは、文献検討を通し、看護師の研究成果活用力を測定できる尺度が未開発であり、研究成果活用力の現状も未解明であることを確認した後、研究の第1段階として、看護師による看護実践場面への研究成果活用経験を表す概念を創出する質的帰納的研究を行った (野本・舟島他, 2004)。また、第2段階として、その成果を基盤とする「研究成果活用力自己評価尺度 - 臨床看護師用 - (以下、SRUC)」(亀岡他, 2012)の開発、第3段階として、SRUCを用いた看護師の研究成果活用力の現状、及び、関係する個人特性を探索した (亀岡他, 2010, 2011)。その結果、次の3点の示唆を得た。看護師の多くは、研究成果活用力が不足し、その自律的向上を課題としている。看護師が研究成果活用力を自律的に高めるには、信頼性と妥当性を備えた自己評価尺度の活用が効果的である。「研究成果活用力に対する自己評価」と「看護実践への研究成果活用への挑戦」を組み込む教育プログラムは、看護師の自律的な研究成果活用力向上を効果的に支援する可能性が高い。本研究は、これに続く第4段階であり、次の研究目的の達成を目指した。

### 2. 研究の目的

エビデンスに基づく看護実践 (EBN) の推進に向け、病院に就業する看護師の看護実践への研究成果活用力に関わる問題を診断し、その克服を支援する院内教育プログラムを開発、普及する。

### 3. 研究の方法

研究の目的達成に向け、次の4段階を経た。

(1) 看護師の研究成果活用力を解明するため、郵送法による調査を行った。測定用具には、SRUCと看護師特性調査紙を用いた。SRUCは、6下位尺度35項目の5段階リカート型尺度であり、各項目は、研究成果活用の実現に重要な行動を示す。全国75病院の看護師1462名に調査票を配布し、収集したデータを統計学的に分析した (調査期間: 2016年6月8日から8月4日まで)。

(2) 看護師の研究成果活用に関わる学習、教育、職場環境の解明に向け、郵送法による調査を行った。測定用具には、病院の属性、及び、研究成果活用に関連し、看護師が活用できる学習環境、教育機会の状況を調査するための全43質問項目から成る質問紙を作成して用いた。質問紙の内容的妥当性はパイロットスタディを通して確保した。看護部長が研究協力に同意した日本の109病院に質問紙を配布し、院内教育責任者による回答とその返信用封筒を用いた投函を依頼した。分析は、統計学的に行った (調査期間: 2016年6月8日から8月4日まで)。

(3) 先行研究の成果、及び(1)(2)の調査結果を基盤とし、看護師がその研究成果活用力を自己診断する方法を考案した。また、看護師が、自己診断の結果に基づき、自己の必要な研修を選択受講できる「看護師の研究成果活用力向上を支援する問題克服型教育プログラム」を作成した。完成度の高いプログラム作成に向けては、共同研究者間の検討を繰り返した。

(4) 特徴の異なる2病院の看護師を対象に任意の参加者を募り、「看護師の研究成果活用力向上を支援する問題克服型教育プログラム」を施行した。また、前後の質問紙調査、事後のグループインタビューを通しその有効性を検証した (実施期間: 2018年11月~2019年10月)。

なお、(1)から(4)は全て、研究代表者の所属施設の倫理審査委員会の承認を得て行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 看護師の研究成果活用力

看護師907名 (回収率62.0%) から質問紙の返送があり、有効回答688名分を分析した。対象者の臨床経験年数は平均16.7年であり、職位はスタッフ看護師が65.2% (449名) を占め、最終学歴は、高等学校559名 (81.3%)、大学74名 (10.8%) 等であった。所属病院の所在地は、北海道・東北から九州・沖縄まで全国にわたり、病床数は100床未満から700床以上まで多様であった。対象者が獲得したSRUC総得点は、範囲35から168、平均89.8 (SD=25.7)、1項目あたりの得点の平均は、範囲2.4から3.2、平均2.6 (SD=0.7) であった。これは、2009年調査時の対象者が獲得したそれと比較し、有意に低く ( $p < 0.001$ )、我が国の看護師が依然として研究成果活用力の向上を課題としていることを示した。

#### (2) 看護師の研究成果活用に関わる学習、教育、職場環境

97病院 (回収率89.0%) より回答を得た。設置主体は、国公立が11病院 (11.3%)、公的が34病院 (35.1%)、私立が52病院 (53.6%) であり、病床数は、700床以上 (4病院、4.1%) から100床未満 (3病院、3.1%) までを含んだ。

97病院中25病院 (25.8%) は図書室、54病院 (55.7%) は図書室があり、18病院 (18.6%) は図書室も図書室もなかった。文献検索の設備は、37病院 (38.1%) が<sup>†</sup>整っている、55病院 (56.7%)

が「整っていない」と回答した。病院で使える文献データベースは、医中誌 Web が最も多く、43 病院（44.3%）であった。海外の看護学文献を検索できる CINAHL を使える病院は、6 病院（6.2%）に止まった。看護師のためのインターネット環境は、43 病院（44.4%）が「整っている」、50 病院（51.6%）が「整っていない」と回答した。看護師が最新の研究成果に触れる機会となる院外の研修や学会参加を支援する制度は 93%

表 SRUC総得点に基づく研究成果活用力の診断と推奨される研修

SRUC 総得点	研究成果活用力診断カテゴリ	推奨される研修とその概要
35 ~ 63	レベル1：研究成果活用力が全体的に不足し、看護実践への研究成果活用上重要な行動をほとんどとれていない。基礎的事項から段階的に学習を積み重ねることが推奨される。	研修A 基盤知識修得研修：講義、及び演習を通して研究成果活用の重要性、基盤となる看護研究の知識とその学習継続の意義などを学ぶ。 研修B 基盤技術修得研修：講義、及び模擬状況（紙上事例）演習を通して、研究成果を探し、活用可能性を査定し、安全かつ効果的にその活用による看護実践を進めていくために必要な基本的知識・技術を学ぶ。
64 ~ 104	レベル2：研究成果活用力が多少備わってはいるもののまだまだ不足しており、看護実践への研究成果活用上重要な行動を確実にとるのが難しい。模擬状況下での学習を通じた基礎的事項の確実な修得が推奨される。	研修C 基盤技術修得研修：講義、及び臨床の場で実際に研究成果を活用する演習を通し、研究成果を探し、活用可能性を査定し、安全かつ効果的にその活用による看護実践を進めていくために必要な知識・技術の向上をめざす。
105 ~ 115	レベル3：ある程度の研究成果活用力が備わっており、看護実践への研究成果活用上重要な行動を一定程度とれている。確実にとれるようになるために、臨床の場で相談や助言を受けながら看護実践への研究成果活用を経験することが推奨される。	研修D 総合力向上研修：講義、及び演習を通し、研究成果活用力を自ら高めていくために不可欠な自己評価の方法を学ぶ。
116 ~ 139	レベル4：研究成果活用力が比較的高く、看護実践への研究成果活用上重要な行動をかなり確実にとれている。さらに研究成果活用力を高めるために、研究成果活用力の自律的向上につながる方法の修得が推奨される。	
140 以上	レベル5：十分な研究成果活用力を備えており、看護実践への研究成果活用上重要な行動をかなり確実にとれている。教育プログラム受講の必要はなく、看護実践への研究成果活用への継続的な取り組みが推奨される。	

注) レベル1とレベル2の看護師には、いずれもまず研修A、続いて研修Bの受講が推奨される。その後、レベルの向上に伴い研修C、Dへと進む。

（95.9%）に存在した。看護師が専門性の高い看護実践上の問題を相談できる人材は 80 病院（82.5%）、研究上の相談が可能人材は 72 病院（74.2%）が確保していた。

研究成果活用に焦点を当てた研修を実施している病院は 17 病院（17.5%）、文献検索に焦点を当てた研修を実施している病院は 36 病院（37.1%）、研究論文の評価に焦点を当てた研修を実施している病院は 11 病院（11.3%）であった。また、97 病院中 77 病院（79.4%）は、看護師の研究成果活用に関する教育を充実する必要があると回答した。

これらの結果は、我が国の看護師にとって研究成果活用のために活用できる学習環境や学習機会が十分でない現状を示した。

（3）看護師がその研究成果活用力を自己診断するための方法、及び、診断結果に基づき選択受講できる「看護師の研究成果活用力向上を支援する問題克服型教育プログラム」（表）

看護師は、SRUC 全 35 項目に回答し、各項目の点数を合計して総得点を算出し、算出された SRUC 総得点に基づき自己の研究成果活用力がレベル 1 から 5 までのどの段階にあるかを自己診断できる（表）。また、自己診断結果に基づき、研修 A～D を選択的かつ段階的に受講できる。

（4）「看護師の研究成果活用力向上を支援する問題克服型教育プログラム」の有効性

看護部長が研究協力に同意した 2 病院各々において、看護師対象説明会を開催し、参加者を募った。その結果、研究成果活用力がレベル 1 もしくはレベル 2 であると自己診断し、任意に研修参加を希望した看護師は、58 名であった。そこで、これらの看護師を対象に、研修 A、B を行った。その結果、参加者は、研修目的を達成でき、SRUC 総得点は研修前後を通して向上した。これらは、研修 A、B が看護師の研究成果活用力向上に有効であったことを表す。研修 C、D の実施による有効性検証は、今後の課題である。

【引用文献】

- 野本百合子, 舟島なをみ他(2004): 看護実践場面における研究成果活用の概念化 病院に就業する看護師の経験を通して, 看護教育学研究, 13(1), 23-36.
- 亀岡智美, 舟島なをみ他(2010). 病院に就業する看護師の研究成果活用に関する研究 - 研究成果活用力と活用状況の関係に焦点を当てて, 第 30 回日本看護科学学会学術集会講演集, 323.
- 亀岡智美, 舟島なをみ他(2011). 病院に就業する看護師の研究成果活用力に関する特性, 看護教育学研究, 20(2), 10-11.
- 亀岡智美, 舟島なをみ他(2012): 「研究成果活用力自己評価尺度 - 臨床看護師用 -」の開発, 日本看護科学会誌, 32(4), 12-21.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 亀岡智美
2. 発表標題 看護職者の研究成果活用力向上を支援する教育プログラムの開発 - 意義と展望 -
3. 学会等名 日本看護教育学学会第28回学術集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 亀岡智美・舟島なをみ
2. 発表標題 病院に就業する看護師の研究成果活用への学習意欲とそれに関する特性
3. 学会等名 日本看護科学学会第38回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kameoka T., Funashima N., Yokoyama, K., Nomoto Y.
2. 発表標題 Learning Environment and Learning Opportunity Associated With Research Utilization for Nurses in Japanese Hospitals
3. 学会等名 44th Biennial Convention, Sigma Theta Tau International, Honor Society of Nursing (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 亀岡智美, 舟島なをみ
2. 発表標題 病院に就業する看護師の研究成果活用力 - 2016年と2009年の調査結果の比較 -
3. 学会等名 第48回日本看護学会(看護教育)学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kameoka, T., Funashima, N., & Yokoyama, K.
2. 発表標題 Trends in Japanese Studies on Research Utilization in Nursing Practice
3. 学会等名 22nd Qualitative Health Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 亀岡智美, 舟島なをみ
2. 発表標題 看護師の研究成果活用力向上を支援する教育プログラムの開発 - 第一段階に位置づく「基盤知識修得研修」の有効性検証 -
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	舟島 なをみ  (Funashima Naomi)  (00229098)	新潟県立看護大学・看護学部・教授    (23101)	
研究分担者	上國料 美香  (Kamikokuryo Mika)  (10632200)	国立研究開発法人国立国際医療研究センター・その他部局等・国立看護大学校 講師    (82610)	
研究分担者	山澄 直美  (Yamasumi Naomi)  (50404918)	長崎県立大学・看護栄養学部・教授    (27301)	

